破船

吉村昭

破船

新潮文庫　よ－5－18

昭和六十年三月二十五日　発行
昭和六十二年六月十五日　六刷

著者　吉村昭
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六－五一一一
編集部（〇三）二六六－五四四〇
振替東京四－八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Akira Yoshimura 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-111718-7 C0193

文庫

破船

吉村　昭著

新潮社版

破

船

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

波打ち際に、古びた菅笠が所々に動いている。岩礁のつづく遠い岸に砕けた波の飛沫があがると、次々に飛沫が近づき、伊作の立つ岸の海水もにわかにふくれ上って、岩に激突すると散った。

雨はかなりの降りで、海面は白く煙っている。笠の破れ目から波しぶきのまじった雨水が流れ落ちていた。岩礁のつらなる海岸に、わずかばかりの砂浜があり、そこにも笠が動き、岸に寄せられた木片が集められている。

伊作は、波がひくのを待って海水に足をふみ入れると、岩の間にはさまった流木をつかんだ。破船した船の材にちがいなく、ゆるく弧をえがいていて釘穴らしいくぼみもある。九歳のかれの力には余るものだったが、足を岩角にふんばって引くと材が岩の間から少しはなれた。

かれは、波頭が水しぶきを散らしながら近づくのを眼にして、岸に急いだ。背後で波の砕

ける音がし、海水が笠を音高くたたいて降りかかってきた。波がひきはじめると、泡立つ海水の中にふみ込み流木に手をかけた。

そうした動作を繰返しているうちに、流木が少しずつ岸に近づき、やがて大きな波に乗って岸に打ち揚げられてきた。かれは、波に運び去られるのを防ぐため材にしがみついた。

材のくぼみに指を食いこませて波打ちぎわから引き揚げると、村道の方へ曳いていった。

流木を束ねて背に負うた者たちが、雨に打たれながら磯をはなれて村道にあがってゆく。それらの流木よりも伊作の曳く材の方がはるかに大きく、材質も固そうであった。家に運べばかなりの薪が出来るのに、死人を焼くのに使ってしまうことが惜しく思えた。

村道にあがると、死人の出た家から笠をつけた女が出てきて、材を曳くのに手を貸してくれた。家の板戸を開き、伊作は女と材を曳き入れた。土間には、流木が無造作に積み上げられ、材はその傍に置かれた。

かれは、笠の紐をとき材の上に腰をおろして、家の奥に眼を向けた。死人は五十歳を越えた金蔵という男で、わずかに腰のあたりに布が巻かれているだけで裸身であった。病臥するようになった頃には食欲が失われていたが、数日前から家族は水を飲ませるだけになっていた。死の定まった者に、食物をあたえる家族はいない。

坐棺におさめられる死人は、硬直のはじまらぬ前の処置として膝を折り曲げられ、さらに

荒縄でかたく縛りつけられて、死人柱に背をもたせて坐らされていた。骨が皮膚の表面に浮き出し、腹部のみが痼ったように異常なほどふくれ上っている。白髪の細い丁髷の上に、十字に結び合わせた魔除けの苧殻がのせられていて、頭が少し前に垂れていた。

伊作の母が、床に置かれた棺を拭いている。炉には、村の者に振舞われる雑炊が大きな鍋で煮られ、その匂いが土間にも漂ってきている。

雨が勢いを強めたらしく、波の音が薄らぎ、雨音が家を包みこんできた。

かれは、鍋の中を杓子でかき廻す女の手の動きを見つめていた。

翌朝、雨はあがり、秋らしい澄んだ空がひろがっていた。

家々から人が出てきて、死人の出た家に集ってきた。家の中では、村の老女たちが低い声で読経をしていた。

伊作は、男たちと流木を割って作った薪の束を背負い、金蔵の家を出た。枯枝のかさばった束を背にした男もいる。

かれは、男たちの後について細い村道をたどると、峠に通じる山路にかかった。

村の背後には岩の所々むき出しになった荒々しい山肌がのしかかっている。十七戸の小さ

な家々は、海に押し落されまいとして狭い海岸線にしがみついているようにみえる。家の板壁は、潮風にさらされつづけているためか、粉をふいたように白い。萱ぶきの屋根には、風に吹き飛ばされることを防ぐため石塊が数多くのせられているが、石も白茶けている。家の周辺のゆるい傾斜地には、段状の耕地がある。肥料をあたえても砂礫の多い土は肥えることもなく、乏しい作物しか育たない。穀類は、稗、粟、黍にかぎられていた。

伊作は、男たちと山路から樹林の中へ入っていった。林の中の土は雨水をふくみ、水の溜った個所もある。かれは、何度も足を滑らせながら男たちの後から路をたどった。

やがて樹林がきれ、小さな墓石や古びた卒塔婆の並ぶ空地に出た。その地の片隅に、石垣で三方をかこんだ焼場があり、男たちは近づくと背の薪や枯枝の束をおろした。

伊作は、男たちと近くの石に腰をおろした。額や首筋に湧いた汗が、潮風にふれて快い。かれは、村を見下した。

細長い葬列が金蔵の家の前をはなれて、海沿いの村道を動いてくる。先頭には竹竿の先端につけられた長い白布がひるがえり、その後に丸太でかつがれた棺がつづいている。列の後部には子供たちの歩く姿がみえた。

「今日の仏のように、口べらし様では死にたくねえな」

男の一人が、つぶやくように言った。

金蔵は、その年の夏、蛸つきに岩礁を歩きまわっている折、足をすべらせて腰を岩角に激しく打ちつけ、家で身を横たえるようになった。足腰の立たなくなった金蔵は、家族にとって働くことなく食物を口にするだけの荷厄介な存在であり、限られた食物しか保有していない村にとって、病人が死を迎えるのは口べらしの意味をもっている。

人の死は、その直後、家族や村人を悲しませはするが、村には霊帰りの信仰があり、諦めも早い。生命は神仏の授かりもので、人の霊は死と同時に海の彼方に去るが、時を得て村に霊帰りし女の胎内に宿って嬰児としてよみがえる。死は霊帰りまでの深い休息期間であり、村人たちが長時間悲しむことは死者の安息をかき乱すものだとされている。墓地の墓石や卒塔婆が一様に海に向けて立てられているのは、霊が村にもどるのを願う意をふくんだものであった。

葬列は、山路にかかると動きがゆるやかになった。

伊作は、列の動きをながめながら、父を思った。父は、春、三年切りの年季奉公で島の南端にある西廻り船の出入りが頻繁な港の回船問屋に売られていった。それは、父が望んだことで、船の下子として働いているはずであった。

伊作を頭に弟と妹がいたが、昨年暮れ、さらに女児が産まれた時、父は年季に出る気持をかためたようだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

水子の命を断つ習わしが他の地にあることは耳にしているが、村にはない。みごもることは死者の霊が村にもどってきたことを意味し、生まれ出てきた嬰児を死に追いやるなどということは、たとえ家族が飢えるおそれがあっても許されない。

伊作は、夜、ほの暗い部屋の中で母におおいかぶさった父の体が律動的に動き、露わになった母の足が、膝を屈したり強く伸びたりする情景を何度も眼にした。それが、先祖の霊帰りをうながす行為であることは知っていたが、産まれた嬰児が加わることによって家族の貧窮がさらに深まることも知っていた。

村は、海に鋭くせり出した岬の断崖で南を閉ざされ、わずかに北への峠越しの路で他の村落へ通じている。それは、岩場づたいの険阻な路で、深い谷を二つも渉り、蔓のからみ合う樹林の中の急斜面をのぼってようやく峠にたどりつく。そうした地勢が、村を孤立したものにさせていた。村の者たちは、その路をたどって漁獲物を他の村落に運び、農作物その他に換えて持ち帰る。が、それらは、家族の者の空腹をいやすには不足であった。

飢えから家族を守るのに容易な方法は、家族が身を売ることであった。峠を越えた隣接の村には、口入れ屋を兼ねた塩買いの商人がいて、まとまった金を身売りの代価としてあたえてくれる。その金で家族の者は穀物を買い入れ、家に運ぶ。

主として売られるのは娘だが、戸主である男も身売りをする。父とともに村から出ていっ

た十四歳のたつという娘は、十年切りの年季奉公の約束で銀六十匁で売られて行ったが、三年切りの父が同額の銀をあたえられたのは異例の好条件と言えた。それは、父が村でも際立った頑健な体をもち、舟の操作にも長けていたからにちがいなかった。

「三年たてばもどる。それまでは子供たちを飢えさせるな」

口入れ屋の戸口で、父は、母と伊作に鋭い眼を向けた。

母は銀の一部で穀物を買い、伊作は母とともにそれを背負って山路を村へ向った。かれは、多くの銀があたえられたことに父への畏敬の念をいだき、自分もそのような肉体を得たいと思った。

墓地で憩う男たちは、娘や息子を年季に出している者たちばかりであった。伊作の傍に坐っている貧弱な体をした男は、昨秋、妻を五年切りで売っている。村に残っている戸主の男は、薪や枯枝を墓地に運びあげた者たちと、棺をかついでくる四人の男だけであった。

人の列の先端が樹林の中に入るのを眼にすると、男たちはおもむろに腰をあげた。

かれらは、焼場の内部に残された灰をならし、石垣の通風孔につまった土や灰をとりのぞいた。束ねられた枯枝の縄がとかれ、石垣に材が渡され井桁に組まれた。

鉦の鳴る音がきこえ、人の列が樹林の中を近づいてきた。白布をつけた竿を腋にかかえているのは伊作の母で、林のはずれから出ると竿を高く立てた。鉦をたたく老人の後に読経す

る女たちがつづき、棺もゆれながら現われた。

母が竿を土に突き立て、棺が焼場のかたわらに置かれた。棺をかついできた者たちは、思い思いの場所に腰をおろし、胸もとをはだけたり汗をぬぐったりしている。焼骨の仕度を整えた男たちが、棺に結びつけられた丸太をはずし、棺をかつぎ上げて焼場の材の上にのせた。伊作は、男たちの指示にしたがって薪を材の間にさし入れた。

火の点じられた苧殻が枯枝の上に落されると、煙が湧き、枝が燃えはじめた。坐っていた者たちが立ち上って石垣をとりかこんだ。再び鉦がたたかれ、読経の声が起った。

組まれた材に火が移り、棺が炎に包まれた。潮風に、炎が布のはためくような音をたててなびく。材がはじける度に、火の粉が散った。

伊作は、男たちと蓆(むしろ)を墓地の近くの渓流にひたしては、炎の上に投げ上げた。炎を抑えることによって、死人の体はよく焼けるという。棺が焼けくずれ、露出した死人の体から多彩な炎がふき出しはじめた。眩(まば)ゆい黄色の炎がみえるかと思うと、緑色の炎に変ったりする。薪が加えられ、濡れた蓆が投げ上げられた。

死人の体が小さくなった頃、黍で作られた焼団子が配られた。伊作は、炎を見つめながら口を動かしていた。

黒くなった遺体を男たちが棒で荒々しくつつくと、さまざまな色の小さな炎が湧き出た。

それが反復されるうちに炎は衰え、遺体も熾った炭火のように朱色になった。

日が、傾きはじめた。

林のはずれの樹林に蓆が屋根のように張られ、家族はその下で夜守りをし、翌朝、骨拾いがおこなわれることになった。村人たちは合掌すると、焼場をはなれた。

伊作は、大柄な母の後について樹林の中の路をおりはじめた。かれは、母に何度殴られたか数知れない。力が驚くほど強く、耳がしばらく聞こえなくなったこともある。殴られる原因はさまざまだったが、骨惜しみしたことを詰られた時が最も多い。魚をみろ、魚でさえいつも体を動かしている、と母は口癖のように荒々しい声を浴びせかけてきた。母は恐しい存在だったが、容赦なく自分を殴る母に身を託しきっていられるような安堵も感じていた。

樹林をくぐりぬけると、山路に出た。あたりに西日があふれ、海も輝いている。小さな岬の上に数羽の烏が舞っているのがみえた。

母は、老いた女と言葉を交しながら山路をくだっている。

伊作は、初めて葬いに焼場へ薪を運ぶ男たちに加えられたことに満ち足りたものを感じていた。それは大人に準じた扱いをされたことを意味し、やがては棺を男たちとかつげるようにもなるだろう。しかし、かれは同年齢の者よりも小柄で、痩せてもいた。父は、二年半後に年季が明けて村にもどってくるはずだが、父と入れ代りに、自分も村の十代の男や女と同

じように年齢を二、三歳偽って年季奉公に出されるにちがいなかった。その折に体が小さければ、口入れ屋は周旋を拒むか、たとえ引受けてくれたとしても銀の量はわずかだろう。

伊作は、いつもの癖で背伸びをするように爪先を立てて山路をくだった。

前方を歩いていた女たちが足をとめ、それにつづく村人たちも立ちどまった。かれらは、一様に左手の方向に眼を向けている。

伊作も、それにならった。

岩の露出した低い山と山の間から、遠く緑につつまれた峯のつらなりが見える。

「山が赤くなってきた」

傍に立つ女が、つぶやくように低い声で言った。

峯々は、西日を受けて輝いているが、ひときわ高く屹立した峯の頂き附近に、染料をしたたり落したような淡い朱の色がみえる。二日つづきの雨で霧が立ちこめ、峯を望むことはできなかったが、その間に峯の樹葉は色づきはじめていたのだろう。

伊作は、峯を見つめた。

紅葉は、例年、その峯の頂きからはじまり、徐々に他の峯々の稜線に移り、やがて雪崩のように速度を早めて山肌を朱の色に染めながら下方へひろがってゆく。それは、深く刻まれた谷々を越え、低い山をおおい、やがて村の背後の山を染める。その頃には、すでに遠い峯々

に枯葉の色がひろがっているのが常であった。

村に、秋の気配は濃い。茅の尾花が穂をのばし、その頃、磯に寄ってくる小さい尾花蛸もとれはじめている。それはきわめて美味で、生で口に入れたり茹でて食べたりする。家々では、子供たちが干物にするため開いて、竿から竿に張った縄につるしていた。

尾花蛸の漁獲についで紅葉の訪れがあるが、村の者たちは山が赤く染まるのを眼にして大きな期待をいだく。

紅葉の色が褪せ、葉が落ちはじめる頃から海は荒れがちになる。二日ほど凪の日があると、その後の数日間は激浪が押し寄せ、波しぶきが家々にも降りかかってくる。荒れた海は、時として村に思わぬ恵みをあたえてくれる。それは、乏しい耕地や磯で得られるものなどとは比較にならぬ豊かなもので、数年は村で年季奉公に身を売る者も皆無になる。恵みは稀にしか村にあたえられぬが、人々はその訪れを願って生きている。紅葉は、恵みの訪れる可能性のある時期が近づいてきていることをしめしていた。

村人が歩き出し、列が動きはじめた。かれらは、峯の頂きに眼を向けている。

伊作は、山路を下りながら海をながめた。干潮時で、鋭く突き出た岬の根に岩が露出し、わずかにくぼんだ村の前面の海にも、かすかに水面から頭部をのぞかせた岩がみえ、その附近が泡立っている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com